

フィールド科学教育研究センター

1 フィールド研とは

京都大学フィールド科学教育研究センター（通称フィールド研）は、地球環境問題、特に生態系のつながり、人間と自然のかかわりに関する研究と教育を行うために設置された研究センターである。従来農学研究科と理学研究科に分かれて所属していた日本各地の実験所や演習林などを統合し全学共同利用施設とすることで、より広い視野と長期的な視点を

持った新たな学問を創り出すことを目的としている。現センター長は瀬戸臨海実験所の白山義久教授。

フィールド研が企画研究として推進しているもののひとつが「森里海連環学」である。森から海までの生態系のつながりと人間とのかかわりを探る学問で、森林、河川、海洋などの間でさまざまな共同研究が行われている。

また企画研究は地球環境問題に関する国際共同研究も行われている。たとえば最近では世界中の沿岸域の生物調査を行うNaGISA（Natural Geography In Shore Area）プロジェクトの研究拠点になっている。

また、行政や経済などを志す学生にもフィールドに触れる機会を提供すべく全学向けの教育に力を入れている。

2 研究施設

フィールド研は全国各地に研究施設を持っている。

これらの施設は、天然林を主体とした研究林である森林ステーション、人工的に管理される森林が主体の里域ステーション、海に面した研究拠点である海域ステーションに分けられる。これらの多様な環境にある施設を複合的に利用し、森から海までの生態系のつながりを研究できるのがフィールド研の強みである。

各施設では農学部や理学部での専門教育、全学向けのフィールド実習のほか、各地域に向けた社会教育も行われている。



FSERC



Field Science Education and Reserch Center
http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp

(農・1 温茶)

3 森里海連環学

森林から海洋まで幅広く研究拠点を持つフィールド研が、創設以来の目標として掲げているのが「森里海連環学」の確立である。

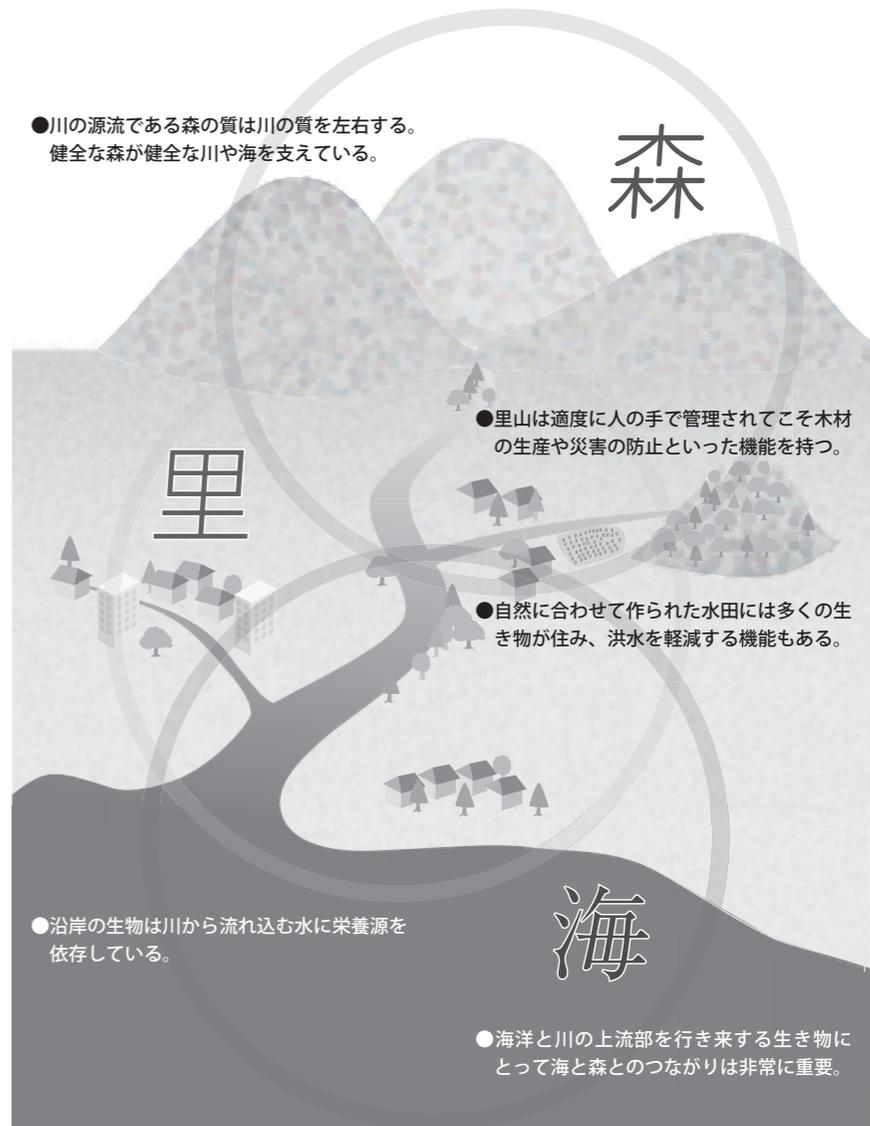
「森」と「海」は川を通じてつながっている。健全な森の生態系によって適切に保たれた栄養分と懸濁物が沿岸の生態系を支えているのである。この連環を考えると人間の活動による環境への影響を無視することはできない。農業や工業は川の水質に影響を与え、自然とは違った物質の循環を作り出す。また交易はその土地の資源を外部に持ち出し、本来そこになかったものを生態系に取り入れる。従来人間は「里山」と呼ばれる環境を作り出し、適度に自然の一部を管理し、利用してきた。この段階では森里海の連環は安定し、人間と自然は共存していた。しかし、近代化によって森や川では下流への影響を無視した開発が行われるようになった。無理な開発と森林や里山の管理不足によって土砂崩れや洪水などの災害は増加し、沿岸の生き物はいなくなり漁獲量は激減した。

これまで森・里・海は学問の面でも行政の面でも縦割りがなされ、個別に扱われてきた。このためつながりに関する知識は乏しく、開発は離れたところへの影響をほとんど考えずに行われていたのである。森里海連環学はこの垣根を取り払い、総合的な視点から自然をとらえると同時に、法律や経済などの社会科学分野を統合し、人間と自然とのかかわりの新たなあり方を提案することを目標としている。

4 全学向け教育

フィールド研は、「教育」と名のつくとおりに全学向けの教育に力を入れている。特に新入生向け少人数セミナー（ポケゼミ）では10以上の科目を開講し、新入生にフィールドに触れる機会を提供している。

夏季休暇中には集中講義「森里海連環



森里海連環の模式図。森里海それぞれに小さな循環の環があり、互いに影響を与え合って「連環」を形成している。

学実習A・B・C」が開講される。これらはフィールド研の複数の施設を利用してひとつの川の上流、中流、下流から河口域でフィールドワークを行い、森里海の連環に触れることができる実習である。文理を問わずさまざまな所属の学生が参加する上、BとCは北海道大学と共同の

実習なのでいろいろな人と交流できる。後期には「森里海連環学」、「海域・陸域統合管理論」などのリレー講義が開講される。これはフィールド研の多数の教員によって行われるもので、自然科学のみならず経済や法律などの内容も含むユニークな講義である。